２０２５年１月２６日顕現後第３主日

ネヘミヤ記　８章１－３、５－６、８－１０節
コリントの信徒への手紙一１２章１２―２７節
ルカによる福音書　４章１４―２１節

新しい２０２５年もすでに半月以上が過ぎました。先週、教会委員任命式と新成人のためのお祈りを行い、礼拝後、新旧合同の教会委員会を行いました。今年もイエス様を仰ぎ見つつ、歩みたいと思います。

始まりという観点で見ますと、『聖餐式聖書日課 C 年』本日の旧約日課と福音書は、何かの始まりにふさわしい個所といえます。旧約日課は「ネヘミヤ記」ですが、歴史について記している文書です。本来は「エズラ記」と一つであったと言われ、実際内容的に連続しており、バビロン捕囚が終了し、イスラエル・ユダヤ人たちがユダヤに戻り、神殿を再建する物語が記されています。本日は、神殿の城壁部分が完成したあとのお話ですが、それを記念して、律法を朗読し、集まった会衆もその朗読に耳を傾ける姿の箇所です。人々は、神殿だけではなく、律法を大切にすることから歩みを始めたのです（ネヘ８：1-3）

旧約日課のあとになりますが、続くお話に、「**彼らは、主がモーセを通して命じられた律法の中にこう記されているのを見いだした。すなわち、イスラエルの人々は第七の月の祭りには、仮庵で過ごし**」（ネヘミヤ８：14）と「仮庵の祭り」について記述があります。この「仮庵の祭り」は、ユダヤ教の三大祭りの一つで、この「仮庵の祭り」が終わると、現在は「律法歓喜祭（シムハット・トーラー）」があります。現在のユダヤ教では、「モーセ五書」を一年間かけて読みます。その読み終わり、そして新たな読み始めが、この「律法歓喜祭（シムハット・トーラー）」にほかなりません。

その大切な「律法」ですが、それは、イスラエルの人々によって、常に主なる神様が望むとおりに守られてきたわけではありませんでした。むしろ、『聖書』には、主なる神様の望み通りに守れなかった姿が描かれているといえます。その意味では、守れるように努力することが大切といえるでしょう。イエス様が育ったナザレの人々が、どれほど律法に熱心であったかはわかりません。しかし、安息日に会堂で集まり「巻物」を読むという記述は、守ろうと努力する人々であった証といえます。

その箇所に入る前に、「**イエスが霊の力に満ちてガリラヤに帰られると、その噂が周り一帯に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から称賛を受けられた**」（ルカ４：14-15）とイエス様の活動がまとめて述べられています。４章１節から１３節までの荒野の誘惑のお話の後、イエス様は、ガリラヤで活動され、皆から称賛されたとまとめられているのです。活動の詳細はわかりませんが、多くの人から高く評価されたということです。それを受けて、「**それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとしてお立ちになった**」（ルカ　４：16）と続くのですが、先にある１４節から１５節のそのつながりは、それでは場所が、イエス

様を良く知っている人々が多い、故郷ナザレに変わるとどうか、という展開を期待させる連続性があります。ただし、「**いつものとおり**」が、安息日に会堂に行くことなのか、「巻物」（広い意味で『聖書』ですが、イザヤ書ですから律法部分ではありません）の朗読を担当することなのか、その両方なのか明確ではありません。「いつものとおり」は、「習慣として、慣習に従って」ということですが、すくなくともイエス様も会堂に集まり、時には『聖書（旧約）』の朗読をすることがあったことがわかります。ただし、問題はそこではありません。「**イエスは巻物を巻き、係の者に返して座られた。会堂にいる皆の目がイエスに注がれた**」（ルカ 4：20）とある通り、問題はイエス様が朗読した後です。小さいころからよく知っているあのイエスが、何らかの活動を始めて、たくさんの人から尊敬されているらしいが、いったい何を話すだろうか、故郷の人々はそう注目したのです。その意味では、何かが始まる部分として、本日の箇所は大切です。ことにルカ福音書が描く物語は、マルコとはお話の順序が異なります。マルコでは最初にある弟子の召命のお話が、ルカでは、この後に続きます。つまりここまでの活動は、イエス様ひとりでということになります。またマルコにあるしばらく活動した後でナザレを訪問し、そこでは敬われなかったというお話（マルコ 6：1-6）はルカにはなく、内容は異なりますがこの部分がそれに相当します。ただし、本日の福音書は、「**そこでイエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた**」（ルカ 4：21）であり、お話の途中で終わっていますので、その部分は来週です。

さて、イエス様が読まれた『聖書』は「イザヤ書」６１章１節２節と４２章７節です。現在の『聖書（旧約）』は、ここにある旧約日課の文言とは少し異なります。ただし、「主のしもべ」に油が注がれ、その人が貧しい人への福音を告げ、困難な中にある人に解放を行うという、主なる神様の救いの言葉があることは共通しています。そして、その言葉は、それが語られた時代も、イエス様の時代も、そして今も、実現していません。実現とは、「成就する、満たされる」ことですが、どれも「実現」していません。いずれの時代も、世界のどこかで、誰かが不当に捕らわれ。目が見えない人が不自由なまま過ごし、打ちひしがれたままでいます。それでは、なぜ、預言者イザヤはそのようなことを語ったのでしょうか。そしてイエス様はその言葉を受けて、「実現した」と完了形で語ったのでしょうか。それは、主なる神様の意思がそれに他ならないからです。つまり、この世界にある悲しい出来事すべては、主なる神様の意思ではないということです。そして、主なる神様を信じるとき、その一つひとつの解決の糸口が見つかる、言い換えれば、この世界からすべての悲しみがなくなるという希望があるということです。ことに、イエス様が具体的な活動を通して、その希望を示してくださいました。そのイエス様を通して、今年も希望があることを信じ続けることが大切なのです。そこからすべての教会の活動が生まれます。そこに教会の使命があります。わたしたちもその使命を果たす教会の一つとして、今年も歩み続けたいと思います。